

活字をはみだすもの 第22回

小島政二郎の「あとがき」—谷崎潤一郎・菊池寛など

◇開催 11月25日(土) 13:00~14:00

本の「あとがき」に何を書くか、特に決まりがあるわけではないだろう。その本の内容に触れて、関係者への謝辞などを記すのが一般的ではある。だが小島政二郎の「あとがき」は自由奔放だ。話題は谷崎潤一郎との交流や菊池寛の思い出へとそそりいき、ようやく執筆に至る経緯に触れたかと思うと映画界への鬱憤をぶちまけて終わる。文壇の嫌われ者でもあった小島政二郎(山田幸伯『敵中の人 評伝小島政二郎』2015)の面目躍如ともいえる「あとがき」の文章をたどっていこう。

【講師紹介】 多摩大学教授、1959年生。文学と美術・映画などとの交流を主な研究テーマとする。また、横光利一など租界都市上海における日本人作家の活動にも興味を持つ。

講師 中澤 弥 先生



永遠の文学青年 —梶井基次郎の手紙を読む

◇開催 11月25日(土) 15:00~16:00

梶井基次郎の生涯ただ1冊の作品集『檸檬』の出版に尽力し、歿後も4回その全集を編んだフランス文学者・淀野隆三は、一介の文学青年として志なかばに命尽きた梶井の名を千載の文学史に刻んだ立役者でした。その淀野に宛てた大正14年から昭和7年(歿年)までの書簡を読み解きます。『青空』掲載作の舞台裏や川端康成への敬意、文学談義や病状報告などの内容面に加えて、変化していく梶井の筆跡にも注目します。

【講師紹介】 東京大学准教授、1976年生。佐藤春夫を中心に、美術と文学ジャンルの交流や作家の異文化理解に関心がある。著書に『佐藤春夫と大正日本の感性』(鼎書房、2019)、編著に『知られざる佐藤春夫の軌跡』(武蔵野書院、2022)、『佐藤春夫読本』(勉誠出版、2015)など。

講師 河野龍也 先生



神崎清「名作モデル考」の舞台裏

◇開催 12月2日(土) 13:00~14:00

昭和24年6月に神崎清から久米正雄に送られた書簡を取り上げます。雑誌『女性改造』に連載されていた神崎の「名作モデル考」は、その後『名作とそのモデル』としてまとめられ(東京文庫、昭和28年3月)、さらには「現代教養文庫」の1冊として『日本の名作 その作者とモデル』の書名で再刊されました(社会思想研究出版、昭和31年2月)。本書簡により、その執筆の舞台裏を垣間見てみましょう。

【講師紹介】 横浜市立大学教授、1961年生。芥川龍之介の〈人〉と〈文学〉を主たる研究テーマとし、出版メディアと作家、読者の関係にも関心を持つ。また、作家が聴いた音楽を蓄音機とSPLレコードで再現するレコード・コンサートを企画・開催。著書に倉敷市編『薄田泣菫読本』(共編著、翰林書房、2019)、他。

講師 庄司達也 先生



平林たい子「かういふ女」ができるまで —原題「押しの強い女」の紆余曲折

◇開催 12月2日(土) 15:00~16:00

戦後の第一回女流文学賞を受賞したことで知られる平林たい子「かういふ女」は、雑誌『展望』1946年10月号に発表されました。この作品について平林本人は、おびただしい書き込みがあり、ほとんど外出もせずに座り通しで書いた苦心の作品だと述べています。「押しの強い女」が原題だったこの作品の自筆原稿を確認しながら、作品が完成していく現場に立ち会い、作家が作品を生み出すプロセスを考えてみましょう。

【講師紹介】 武蔵野大学教授、1975年生。出版メディアと作家の関係、横光利一や水上勉などを主に研究テーマとしている。共著に『水上勉の時代』(田畑書店、2019)など。

講師 掛野剛史 先生



※参加費無料 参加ご希望の方は左記 QR コード、または別紙申込書をご覧ください。

(2023.10.26)

八木書店 古書部 〒101-0051 東京都千代田区神田神保町 1-1-7 営業: 10 時~18 時 定休: 日祝
TEL 03-3291-8221 FAX 03-3291-8223 <https://catalogue.books-yagi.co.jp/> <mailto:kosyo@books-yagi.co.jp>